Let’s トラベル！みんなの世界へさぁ行こう！

社会福祉法人あすなろ会

板垣 風香・中村 茉莉奈

1　はじめに

生活や遊びの中で様々な経験を通し成長していく子どもたち。日々子どもたちと過ごす中で、１人ひとりに大人が想像もしないような自由な世界が広がっていると感じる。その世界を一緒に旅をしたいという思いからテーマとした。旅というテーマをもとに、0，1，２歳児を荷造りの時期、3，4，5歳児を旅立ちの時期だと考えた。身のまわりの環境や人との関わりが、子どもたちの育ちにどのように影響していくのかを学んだ今、保育者としてさらに成長していくために表現活動を通して考察していく。

1-1　荷造り

0，1，２歳児では、様々な素材との出会いがある。寒天、氷、片栗粉、絵の具あそび、小麦粉粘土などの活動を通して、「楽しい」「おもしろい」「不思議」などの気持ちを経験していく。この時期を“荷造り”と考えた。

1-2　旅立ち

3，4，5歳児になると、身のまわりの素材を表現するための手段として使えるようになっていく。遊びの中で様々な素材に触れた子どもたちは、今までの驚きや発見、感動をもとにイメージの世界を広げ描いていく。この時期を“旅立ち”と考えた。

2　荷造り

2-1　初めての絵の具

1歳児クラスの５月に初めての絵の具遊びを行った。1歳児から入所した子にとっては絵の具に触れる初めての機会だったかもしれない。廃材で作ったスタンプで好きな形を押していく子どもたち。少し離れた場所から不安そうな表情でこちらを見ていたＲくん。普段から初めてのことに緊張する様子があったため、「苦手なのかもね。」と職員で話し気にかけていた。活動が終盤になり、絵の具に触れてみてほしい、触れてみたら楽しくなるかもしれない、という思いから「一緒にやってみよう。」と不安が和らぐよう意識して声をかけた。しかし、「やだ！」と涙を流し一生懸命に訴える。無理強いするのはな、と迷っていた時、先輩保育士がＲくんが遊んでいたブロックの中からキリンを取り出し、「キリンさんとやってみる？」と声をかけた。すると、すっと涙が止まり「うん。」と手をつないで絵の具の場へと向かった。その姿から、Ｒくんにとってキリンはただの玩具ではなく、安心でき、勇気の出る心強い友だちだったのだと気づいた。子どもの世界に入り、見えているものを想像し、心を寄せる。“寄り添う“を学んだ場面であった。

写真１　初めての絵の具あそび

2-2　ひんやり絵の具

２歳児の８月に氷絵の具を行った。透明感のある線に触れてみたり、握って氷の冷たさを味わう子どもたち。時間が経つにつれ変化していく様子に夢中である。氷を握りしめていたＲくんは時々氷の様子を確認しながら「ちっちゃくなっちゃった。」とつぶやく。真剣な表情で手元を見つめるＲくんは「なくなっちゃった！」と不思議な出来事に目を輝かせていた。Ａちゃんはキラキラと光る氷そのものに興味津々で、大事そうにどんどん集めていた。氷絵の具特有の淡い色や、氷の冷たさを楽しんでほしいと保育のねらいを立てていた。保育者の予想を超えて様々な方法で関わる子どもたちの姿から、素材の面白さや子どもたち自身の力を改めて知る場面であった。

写真２　氷の冷たさを味わう子どもたち

2-3　わたしのハート

子どもたち１人ひとりが自由に表現を楽しんでほしいと考え、今まで触れてきた素材（絵の具、クレパス、折り紙、スパンコール、カラーセロファン）を使って活動を設定した。それぞれ、絵の具コーナー、クレパスコーナー、キラキラコーナーとして分け、自分の好きな素材を選び画用紙に描いていく。

絵の具コーナーで絵の具を混ぜながら描いていたＡちゃんに「何描いてるの？」と聞くと、「ん～」と返ってきた。イメージをおしつけることになるかもしれないと迷いながらも、「海みたいだね。」と伝えた。すると、そうそうそれだ！と結びついたように「うん、海みたい！」と繰り返すように繰り返した。保育者の言葉が、子どもたちの上手く言葉に出来ない思いを助けることもあるんだなと感じた場面であった。
クレパスで描いた丸の上を絵の具で塗っていたＮちゃんは、「みて！すごいでしょ！」と嬉しそうに保育者に話し始めた。子どもたちの“伝えたい”のエネルギーを丁寧に受け止め認めていきたいと感じた。そんなやりとりが、「わたしってすごい」「わたしはわたしが大好き」という自尊心を育てていくのではないだろうか。

写真３　みてみて！おばけを描いたよ

2-4　出会いのなかで

素材との出会いを通して少しずつ世界を広げ彩ってきた子どもたち。まるで旅行のようにワクワクしたり、勇気が必要な時もあった。荷造りの時期、私たち保育者には、安心出来る環境を整えること、身体の発達発育を捉えそれに合った素材を用意すること、“伝えたい”の気持ちを受け止め認めながら共有していくこと、日々の生活の中で信頼関係を築いていくこと、を大切にし配慮していきたいと感じた。

たくさんの気持ちを知った子どもたちはイメージの世界へと出発していく。

3　旅立ち

素材に触れるあそびの中で、自分のイメージを表現しようとする姿も多くみられるようになっていく。思い出や理想をイメージすることを楽しむようになった子どもたちは、空想へと世界を広げていく。今までの驚きや発見、感動をこころのリュックに詰め込んで、自分の中にある空想の世界へ、いざ出発だ！

ここでは、４歳児クラスで行った活動を紹介する。

3-1　ブレーメンってどんな町？

（1）日々のあそびの中から

発表会に向けて「ブレーメンの音楽隊」の劇あそびを楽しんでいた子どもたち。ある日、男の子が「先生、見て！」「ブレーメン見つけた！」と嬉しそうに地図の本を持ってきて見せてくれた。お話の中の「ブレーメン」が本当にあることに驚いた様子の子どもたち。周りの友だちも寄ってきて、「ドイツだ！」「ドイツって知っとるよ！」と盛り上がっていた。（みんなの中の“ブレーメン”ってどんな所なんだろう？）私は、ブレーメンを見つけてはしゃぐ子どもたちを見て、子どもたちの中にある世界を覗いてみたくなった。

（2）環境構成・導入

ブレーメンってどんな町なのか、みんなで想像して描いてみることにした。今回は、絵の具とパスを自由に使えるようにしたり、画版を向かい合わせにして友だち同士お話をしながらイメージを広げられるようにしたりなど、環境を工夫してみた。

導入では、「町」がイメージしにくい子もいるようだった。「ブレーメンの町ってどんなところなのかな？」という保育士の問いかけに、どう答えたら良いのか分からない様子の子どもたち。イメージが言葉になって出てきにくいことで、保育者が「お花がいっぱいかな？」「海があるのかな？」などと、描く前から具体的に話しすぎてしまった。「それが正解？」と感じた子もいたように思う。保育者の「こういう風に描いてほしい」という考えがついつい言葉になって出てきてしまっているように感じた。「町」の中身を話すよりも、「みんなが住んでいる出雲もひとつの町なんだよ」と、子どもたちが「町」をイメージしやすくなるような言葉がけをするなど、工夫の余地があったように思う。導入の保育者の雰囲気づくり、言葉がけ次第で子どもたちがイメージの世界にどれだけ入り込めるのかが決まるのだと感じた。

（3）子どもたちの様子

子どもたちは、絵の具の混色を楽しみながら描いていた。様々な色の作り方を知った子どもたちは、色の微妙な違いなどにもこだわっていた。パスで線画を描き中を塗ったり、空や海などの広いところを絵の具で描き、家や人などの細かいところをパスで描くなど、絵の具とパスを使い分けている子もいた。また、上が空・下が地面など、画用紙全体を１つの風景としてとらえている子が多かった。「町」というイメージが沸きにくい子も、劇あそびのイメージはしっかりとあるので、ブレーメンの音楽隊のお話の絵を描くことを楽しんでいた。

写真４　混色を楽しみながら絵を描く子どもたち

（４）子どもたちの作品

写真５ 「ブレーメンは夜の町。星がきれい。お月さまがまるい」 暗い夜の町に、星と月が光っている。よく見ると下の方に車も走っている。

写真６ 「ブレーメンのお家。ろばいぬねこにわとりがいるよ」 じっくりと時間をかけて描いていた。赤い家は５階建てだと教えてくれた。

写真７ 「こおりの町。ブレーメンに行ってみたよ」この子のブレーメンは寒いイメージだったようだ。青い小さな点は「小さい氷が飛んでる」とお話してくれた。

3-2　何がうまれる？

（１）絵本のお話から

この活動は、「ふしぎな森のものがたり」という絵本からイメージを広げて、絵を描いた活動である。この絵本は、始めは１本の木しかなかった森に、人や動物がやってきて木を植えて水をあげると、色々な実がなるという話である。

（２）環境構成・導入

今回は、１冊の絵本を何日にも分けて読み進めていった。森がどんどん元気になっていく様子が視覚的にも感じられるように、模造紙にひとりぼっちの木を貼り、生まれてきた実をどんどん森に足していった。毎日絵本を読み進めていくごとに、「先生、今日はあの本いつ読むの？」と興味がわいてきたようだった。３回くらい読み進めたところで、「あのひとりぼっちの木はどうなるの？」と気になりだした様子だった。

活動当日は実際に自分でふしぎな実に水をあげ、イメージの世界に入っていけるようにした。じょうろは６つ用意したが、クラスには 40 人以上の子どもたちがいる。全員が水をあげるのにとても時間がかかってしまうので、事前の話し合いで「じょうろに水を満タンにした状態で、保育者が途中でストップをかけてどんどん回していこう」となっていた。もちろん子どもたちの活動の時間を確保するための案だったが、

今回の活動では、お話の世界に入り、イメージをふくらませる楽しさを味わうことねらいにしていたため、この「水やり」はとても大事にしたい場面だった。途中で保育者が「はい、ストップね。交代！」とするのは、子どもたち一人ひとりが自分のペースでお話の世界に入っていくことを大切に考えると、今回の場合はそれが妨げになってしまうのではないかと考え、もう一度話し合った結果、水は少なめにして一人ひとりが空っぽになるまで水やりができるようにしよう！となった。自分の手で水をあげることができた子どもたちはとても嬉しそうで、「元気になってねって言ったよ！」と教えてくれた子もいた。水をあげ終わった子から自分の画版のところに行き、それぞれのタイミングで描き始める。今回も画版を向かい合わせにしていたため、友だちとの会話も弾んでいた。

写真８　ひとりぼっちの木に水をやる子どもたち

（3）ＳくんとＫくんの絵

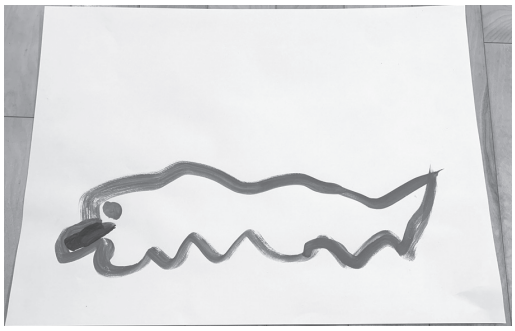

写真９　ＳくんとＫくんの絵　「へびがでてきた」

この２枚の絵は、ＳくんとＫくんが描いた絵だ。題名も同じで絵も似ている。この２人は向かい合って描いていた。どちらかが先に描いて、どちらかがそれを見て描いたのだろう。保育者が「ヘビが出てきたんだね」と声をかけると、Ｓくんは、「木といえば、カブトムシ・クワガタ・ヘビだよね！」と言った。それを聞いてＫくんは、「木に登るヘビは毒があるんだよ。僕のは草むらにおるやつだけん、毒はないよ」と話してくれた。Ｓくんには「木といえば、、、」というイメージがあり、ＫくんもＳくんの話をよく聞いて、自分のイメージを話している。もし、保育者が完成した絵だけを見ていたら、こんな会話があったなんて想像できない。子どもたちの世界は、画版の外にも、「こんなにも広く広がっているんだ」という驚きと、保育者が子どもたちの世界の中に入っていくことの大事さを改めて感じた場面だった。

（4）子どもたちの作品

写真 10 「花火と虹とハートの実。石の像が見てる」この子のひとりぼっちの木からは、花火と虹とハートの実が生まれた。「隣にいるのは誰？」と保育者が聞くと、「ぞう！」と答えてくれたので、動物のゾウのことかと思い、「ゾウさんなんだ」と言うと、「ちがうよ！石の像だよ！」と教えてくれた。

写真 11 「ハートの実が生まれたよ」
「ハートが集まったらお花が咲くんだよ」と嬉しそうに話してくれた。

写真 12 「ダイヤモンドが生まれた」
パレットの上で様々な色をつくり、きらきらの宝石を描いていた。「いろんな光があって、全部違うんだよ」と嬉しそうに話してくれた。

3-3　自由に、のびのびと

「自由に・のびのびと」表現できる環境を意図的に作ることはとても難しく、一見子ども任せのようで、その中には細やかな配慮が必要だということが分かった。

・子どもたちが何に興味をもっているのか
・子どもたちのわくわくを引き出せるような環境設定、導入、声掛け
・子どもたちの表現に対する保育者の受け止め方
・一人ひとりが安心して表現できる関係づくり
・保育者の「想像する力」「共感する力」

その環境を作り出すことができたなら、その先にある子どもたちの素敵な世界を覗くことができ、旅をすることができると思う。

そしてなによりも、「今日も、子どもたちの楽しそうな顔がみたい！」という思いが大切なのではないか。

4　まとめ

○でも×でも△でもない、子どもたちの中にある素敵な世界。その世界への扉を「あーけーて！」とノックし、「どうぞ！」と開けてくれた扉の中に入り、その子と一緒にその世界を旅するのが、私たち保育者なのではないかと思う。

「みんなちがってみんないい」

誰もが知っている言葉だが、本当の意味で心がそう思えることは、とても難しいことなんだと感じた。日々の保育を振り返ってみると、私たちはつい、自分の物差しで子どもたちのことを測ってしまっていることにも気づいた。たとえ見えなくても、「そこに私の知らない世界がある」と思って子どもたちと関わることは、子どもたち一人ひとりのありのままを受け止めることに繋がると思う。

「躍る心をもつ」

子どもたちの行動、表現にいつもワクワクする保育者でありたい。子どもたちの世界を楽しみ、旅行に行くようなワクワク感、何があるんだろう？と見慣れた世界では見逃してしまうようなところも、「あ、ステキ！」と心が躍る。そんな旅人のような保育者でいたい。